

横綱白鵬に学ぶ

1. 「型を持ち、型にこだわらず」

右掲は、GWの5月4日にNHKで放送された「プロフェッショナル 仕事の流儀」のHPです。ご覧になられた方も多いたと思いますが、私が、凄いと思ったことを書いてみたいと思います。



まず、「プロフェッショナルとは？」という問いかけに白鵬は「型をもって、型にこだわらない人間がプロフェッショナルだと思う」と答えています。

白鵬の得意の型は「右四つ」(左上手、右下手)ですが、毎回、この型になれる訳ではないのです。当然、ベストを狙って「右四つ」の立ち合いをする訳ですが、相手の方が早くて組めない場合もある訳です。そんな時に、慌てずに流れに合わせて自分の体勢をつくる努力をして、相手の動きにチャンスを見出して技を出す訳です。

自分の型にハマると無類の強さを発揮するのです。元横綱千代の富士は、白鵬のように体力的に恵まれた方ではなかったのですが、「右四つ」というよりも左で前禪をとり相手を引き付けて、浮き上がらせてパワーを発揮させるという型を身に付けて横綱になったと言われています。これは、どんな事にも当てはまると思うのですが、相手があつての事ですから自分の思う通りには何事も進まないのです。

この事は、システムの世界では「Fit&Gap」という言葉があるのですが、得意商品としてパッケージ・ソフトを提供するのですが、同じような業種・業態であっても企業には独自性があるので、パッケージと自社の現状との違いを検討する「Fit&Gap」をするのです。まず、「Fit」は「型」にはめようとする訳ですが、当然、自社の「実情」があるので「型」との間に「Gap」が出て、そのギャップを埋める方法を検討する訳です。そのまま使うのか、自社用に変更するのか、使わないのかと選択肢があるので、どれかを選ぶ訳です。この「型」(パッケージ)があるから、お客様は検討しやすいのです。

白鵬の凄い点は、パッケージという得意が当てはまらないお客様に対しても、変幻自在の対応ができるのがプロだと言っている事にあります。当然、いろんな相手に対応できる「経験」がなくてはプロとして変幻自在という境地には行けないのですが、システムの世界では、業務経験がものを言う世界なので、いろんなパッケージを持っていると変幻自在の幅も広がる訳です。同じように、相撲の世界でも、いろんなタイプと練習する事により変幻自在の対応が可能になるのです。このいろんなタイプとの練習で経験を積むことで変幻自在が可能になるとも言えるのです。

2. 「最大の敵は、自分」

前述のように、白鵬は対戦が予想される力士と場所前に練習を積み重ねておき、相手との関係性を刷り込んでおくそうなのです。何遍も相手を突き放しておき「強い」という刷り込みを行う訳です。こういう仕込みを行って、その上に、メンタル面での優位性を築いているのです。こういう背景があつて、白鵬は場所前に「あえて身体を作り上げないで不安を残す事で自らに緊張を課す」と言っているのです。そして、場所前に6・7分の出来の時が最高のパフォーマンスを発揮すると信じこんでおり、さらに、実際の対戦相手には見下すという心境で向かうとの事なのです。

相手に「刷り込み」しておき、決して万全に仕上げずに適度の不安をもって「緊張」しながら、相手を「見下す」という事でメンタル優位で臨むのです。確かに、勝負の世界で「横綱」という責任ある地位にいる人のメンタル面を言っていると思います。「緊張」x「見下す」で立ち合いに臨むのです。「最大の敵は、自分」という意味がそこにあるのです。このメンタル・バランスが崩れると何事もうまく行く訳がないと言えるのです。

3. 人生は敵と戦うより難しい

白鵬が「ことわざ」と言っていた「人生は敵と戦うより難しい」という言葉が強烈な響きがありました。確かに、敵と戦っている方が為すべき事がハッキリしているのでやり易いかも知れません。しかし、白鵬は、大鵬の通算優勝回数も抜いたので「目標」というライバルがないのです。未知の世界に行く心境をうまく表現しているのです。

多くの人は、与えられた仕事をこなすという毎日を送っているのですが、例えば、管理職となり、さらに、経営者と地位があがる程に自ら課題を発見して解決していく必要があるのです。P.ドラッカーは「問題が見えなくなると経営はできない」という風に言っていますが、経営者は問題を見つけて、その優先順位をつけて社員に課題として与えるのが仕事と言えるのです。

しかしながら、中小零細企業では、世襲的に経営をつないでいきますが、代を重ねるほどにサラリーマン化して真の課題発見力が欠けるケースが多くなるのです。日進月歩という言葉があるように、時代が変化するスピードはドンドン速まっているのに、その変化に気づかない、あるいは、気づいても手を打てないでは「経営」をしていると言えないのです。これでは、先行きが心もとない状態と言えるのです。

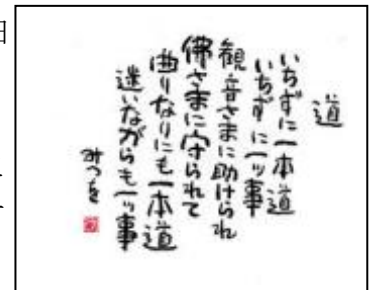
「目標」がなくなるという事は最大のピンチなのですが、それはいきなり見えるのではないのです。毎日の小さな課題と取り組んでいる中から見えて来る物と言えるのです。私は、コンサルタントという立場でいますので「降りてくる」という状態で「課題」を指摘するケースが結構多いのです。もちろん、顕在化している課題にも対応する訳ですが、そういう流れの中でも「降りてくる」ものを信じてお客様にぶつけるようにしています。私にとっては「降りてくる」がなくなれば、自分の存在価値が大きく下がるのです。

4. きれいな姿で土俵に上る

また、横綱白鵬は「プロフェッショナルの美学」で「身体に何もつけずに土俵に上がる事であり、その為に平素の鍛練精進がある」というのです。確かに、包帯やテープをつけている力士が多いが、白鵬は何もつけずにいます。

まず、「鍛練」ですが、柔軟体操から相手との練習で威圧した「刷り込み」を与えるという状態をベースに、取組後の身体のケアを十分しておくという入念さがあるのです。天才と言われる方、例えば、長嶋さんも隠れた練習の虫だったとの事です。私も含めて一般の方は、仕事終わりの一杯を楽しみしているのですが、例えば、その一杯を未来への投資として、仲間だけではなく、異業種の人たちとも交流するという事が、「ケガ」すなわち咄嗟の問題への対応力につながっていくのだと考えています。

「精進」は、誰もが知っていることですが、難しいですね。右掲は相田みつをさんの書ですが、私は、精進を語るには最適な物と思います。横綱には大変失礼な事かも知れませんが、「精進」という味の薄いことを淡々とやり続けるには、「観音さま」や「仏さま」という見えない存在に導かれて「曲がりなりにも一本道、迷いながらも一ツ事」となれば、幸せだと思うのです。



トップに立つからこそ「鍛練」と「精進」が物をいうのです。だれも教えてくれない存在、本当に寂しい限りですが、トップという存在なのです。そのトップに立って、いつも美しい姿でいる事は並大抵の努力ではないと思います。私は、いつも健康で明るく前向きであり続ける為に「鍛練」と「精進」を積み重ねて行きたいと思います。